（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	太田由佳
論文題目	松岡恕庵本草学の研究		

（論文内容の要旨）

本論文では、本草家松岡恕庵（玄達、1668-1746）の伝記を明らかにし、ついで、京都の学者・知識人社会との関係という側面から恕庵本草学の特色を考察し、最後に、恕庵による本草学の朱子学的根拠付けの解明を試みる。巻末に資料編「松岡恕庵著作・関連資料目録」を付す。

第一章「生涯と学問」　恕庵は十代の頃、山崎闇斎(1619-1682)から朱子学および垂加神道の手ほどきを受けた。闇斎の没後、二十代から三十代にかけては、伊藤仁斎(1627-1705)の古義堂や、浅井周璞(1643-1705)の養志堂とも交流を持ちながら儒学や有職、和学など幅広い教養を身につけ、同時に、稲若水(1655-1715)に従って本草研究にも歩を進めていった。四十代に入るといよいよ本草家としての活動が目立つようになった。若水が亡くなり、50歳にさしかかる頃には、恕庵の本草研究は若水を凌ぐほどに進み、輸入薬種の国産化を標榜した当時の幕政の影響も受けて、遂に恕庵は当代を代表する本草学者として広く知られた。教えを請う者は諸国から集まり、諸国の本草情報も恕庵のもとへ齎されるようになった。しかし、恕庵は本草家として繁忙となった後も決して儒学及び神道研究を怠ることはなかった。以後、79歳で没するまで、神道、儒学、本草学を併行して考究・講義し続けた（以上、第一節、ついで第二節として詳細な活動年譜を付す）。

第二章「学界のなかの恕庵本草学」　門人浅井図南(1706-1789)の序文類を手がかりに、当時の京都には儒学を基盤に、和学などの幅広い文化的教養を重んじる学者・知識人社会があったことを確認する。その上で、恕庵の本草学が、医薬中心の既存の本草学とは異なり、薬材を含めた自然物（植物）の、より基礎的な弁別に意を注ぐものであったことを明らかにする（第一節）。

そのように医薬学を脱した恕庵の本草学が、特に同時代の文化的知識人たちからは人文教養の一環として捉えられていた側面を、『蘭品』および『苔品』の編纂経緯から明らかにする。ただし、恕庵自身はあくまでも文献上の名称と実物とを一致させなければならないという明確な目的意識から、「蘭」字、また「苔」字のもとに該当する植物を収載する品類書のジャンルに到達した。恕庵の高弟である江村復所(?-1732)の観賞植物図譜『聚芳帯図左編』(1727)も、序文を寄せた儒者たちからその人文教養的意義を認められていた（第二節）。

恕庵は上古と諸国の風俗への関心から、特に儒者並河天民(1679-1718)とは緊密に交流した。二人は上古の在り方を探る手立てとして、眼前にある現実の観察を重んじるという点で、一定の思想的連帯を有していた。もう一つの連帯として、恕庵の「本草会」を挙げることが出来る。同志の会は当時の京都にあっては珍しいことではなかったが、そ

こに実物の薬草を持ち寄ったという点が特色であった。江村復所の採集記録『採覧随録』に、復所が洛外・洛中で積極的に薬草を採集し、恕庵らとともにその検討を行う様子が見られる（第三節）。

恕庵の本草学はその没後、嗣子定庵と門人小野蘭山(1729-1810)に受け継がれた。定庵は品類書を始めとする恕庵の遺稿出版を精力的に行ったが、本草学を学者の嗜みの一環として捉えるような姿勢も看取することができる。しかし、小野蘭山はそのような儒者・文人的な学問観、学者意識とは距離を置き、恕庵の本草学のみに注目し、それを自身の学問として選択した。特に、その父兄が、同じく恕庵に学びながらも本草以外に特に神道を熱心に学んでいたのに対し、蘭山の本草修学には彼自身の主体的選択があったといえよう。ここに、近世本草学の躍進の足跡を見出すことができる（第四節）。

第三章「学問観」　恕庵は「格物」「正名」の両語を以て本草研究を聖人の学問たるものとして意義付けていた。その本草研究には、物について名と実との混乱を正す、という明確な問題意識が看取される。また「格物」を「格物窮理」の意味で唱えることには、恕庵の朱子学者としての姿勢が表明されている。しかしながら、その門人などはその学問をもっぱら「弁物・正名」と表現し、「格物」の語を用いておらず、そこには学問観の不一致を指摘することができる（第一節）。

恕庵の「太極図」講義草稿をみると、朱子学の師である山崎闇斎から「理気妙合」の立場を受け継いだことは明かであるが、恕庵の妙合を説く言説は闇斎よりもいっそう執拗であり、少なくとも妙合の状態においては、恕庵にとって理と気は全く区別される必要がなかったと言ってよい。恕庵にとって理とは、常に個別の存在のうちに気と渾然として共にあるもの、つまり具体的・実質的な存在そのものであった。そのような「理を窮める」とは、眼前の物を「観察する」ことと同義である。恕庵が懸命に「格物」と主張するものを、周囲の友人や門人らが簡単に「弁物」と言い換えていることは、とりもなおさず、恕庵の「格物」とは結局「弁物」に他ならなかったと結論づけている（第二節）。

資料編では松岡恕庵著作・関連資料のべ153点について詳細な書誌的記述を行っている。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、江戸時代本草学史の研究史において従来断片的にしか考察されて来なかった本草家松岡恕庵を対象として、その伝記と本草学の全体像を実証的に解明しようという、研究史上初めての試みであり、挑戦的かつ優秀な論文である。その学術的貢献は以下の通りである。

第一に、写本（自筆本を含む）、刊本を問わず、現存する閲覧可能なほとんどすべての一次資料のべ153点を、各地の所蔵先において実地に精査し、詳細な書誌的記述を盛り込んだ「松岡恕庵著作・関連資料目録」（資料編として収録）を作成した。この目録は本論文の所論の実証的典拠をなしているのみならず、江戸時代の本草学史、儒学史、神道史、出版文化史に貴重な基礎データを提供するものであり、今後、関連の研究者必見の資料となる。

第二に、恕庵の伝記的解明に大いに貢献している。恕庵が生涯研究しつづけた垂加神道は、山崎闇斎から直接学んだというよりは、その継承者とりわけ玉木葦斎（正英、1671-1736）との交流によるところが大きいこと、闇斎没後、伊藤仁斎の儒学塾古義堂、浅井周璞（周伯）の医学塾養志堂に入門したが、有職故実をはじめ幅広い学識を涵養したことを明らかにし、年譜とともに恕庵の詳細な伝記をはじめて叙述した点は高く評価できる。

第三に、同時代京都の知識人社会における恕庵の学術交流に新しい光を当てている点である。浅井周璞の孫で恕庵の門人となった浅井図南の学問観の分析を通して、図南が医薬中心の医家の本草を家学として受け継ぎながら、恕庵本草学を学ぶ中で、その朱子学的基盤に儒医としての誇りを見出したことを明らかにした。また、儒学を基幹として和学や故実、本草、医学など、さまざまな学術知識が交流する京都の学界のなかで、恕庵とその門人とりわけ江村復所（如圭）の本草書が知識人の人文教養的な需要に応えたこと、地方の風俗が上古の遺風をつたえるという観点から、諸国の情報

を収集し、同じ観点に立つ儒者並河天民と親密な交流をしたこと、復所の採薬記録「採覧随録」や恕庵の書簡をもとに、恕庵の主催した「本草会」の実態を解明したこと、なども徹底した一次資料分析の成果である。

申請者は、本論文第三章「学問観」において、神、儒、本草という異なる領域の学問がなぜ松岡恕庵の学問人生を通じて最後まで併存し得たのか、を解明するための第一歩として、恕庵による本草学の朱子学的根拠付けを考察する。すなわち、稲若水『新校正本草綱目』（1712-14）に寄せた恕庵の跋文、および自著『用薬須知』(1712)自叙によって、恕庵が自己の本草学を「格物」「正名」によって根拠づけたことを指摘する。この分析は説得的であるが、申請者が「太極図」講義草稿である「太極図説管見鈔」にみえる理気妙合の説によって、「理を窮める」とは、眼前の物を「観察する」ことと同義であると結論づけるのは、いささか性急の感がある。申請者も認めているように、恕庵の理気論全体を踏まえた上でのさらなる検討を要する。また、恕庵における神道と本草学の関係の解明も残された課題である。

とはいえ、本論文は、恕庵の著作・関連資料の徹底した博捜考究により、上記のように多くの学術的成果をもたらしている。また、論理構成は堅固、文章は明解達意で無駄がない。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）に値するものと判断する。また平成２３年１月２５日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降